千葉県の医療情報紹介

新風 BREATHE NEW LIFE

帯状疱疹予防のワクチン接種

痛い病気「帯状疱疹」を事前に防ぐ 最新の予防治療！

痛みの強い病気の代表格であり、今や4人に1人はかかるといわれる帯状疱疹。

この病気は、水ぼうそうにかかったことのある人なら、誰でもかかる可能性があることをご存じでしょうか。

昨年、帯状疱疹を予防するためのワクチン接種が承認され、注目を集めています。

そこで今回は、東京歯科大学市川総合病院の髙橋慎一医師に、帯状疱疹とその予防ワクチンについて詳しいお話を伺いました。

東京歯科大学 市川総合病院
皮膚科 教授
髙橋 慎一（たかはし しんいち） 医師

▼帯状疱疹の原因と症状

帯状疱疹は、水ぼうそう（「水痘（すいとう）」の俗称）と同じ「水痘・帯状疱疹ウイルス」が原因で発症します。

このウイルスに初めて感染した時は、帯状疱疹ではなく、水ぼうそうにかかります。そこで免疫ができるため、水ぼうそう自体は、通常一生に一度しかかかりません。

しかし「水痘・帯状疱疹ウイルス」は、体内の神経節という部分に残って潜伏し続けます。

そして、加齢やストレス等で免疫機能が落ちると、再活性化して暴れ出し、今度は帯状疱疹を引き起こします。

初期症状は、体の一部にチクチク、ピリピリといった痛みやかゆみが出ることから始まります。痛みが出始めて数日すると、神経を伝わりながら増殖したウイルスが皮膚へと到達し、赤い発疹が現れます。

帯状疱疹は体幹と顔に出やすいものの、全身のどこにでも現れ、悪化した際の痛みが強いため、胸が痛いと心筋梗塞を疑ったり、頭が痛いから脳腫瘍ではないかと勘違いする患者さんも多くいます。

帯状疱疹か否かの重要な目安として、症状が体の左右どちらかだけに現れるという点があります。神経は背骨から左右別々に走っているため、発疹は体の左右どちらか片側に帯状に現れるのです。

▼消えない痛みや、重い合併症のおそれ

治療には、ウイルスの増殖を抑える抗ウイルス薬を使い、痛みに対してはアセトアミノフェンを主体とする鎮痛剤を使います。通常、軽症・中等症の場合は通院で内服治療となりますが、重症の場合は入院して点滴治療を行います。ポイントは発疹出現後できるだけ早期に（5日以内、できれば3日以内が望ましい）抗ウイルス薬の治療を開始して、重症化を防ぐことです。帯状疱疹では痛みが強いことが問題になりますが、適切な治療が行われれば、多くは3か月以内に痛みが改善します。

ところが、一部の症例では皮疹が治ったあとも疼痛が年余にわたって持続することがあり、これを「帯状疱疹後神経痛」といい、高齢者ほど多くみられます。

さらには、髄膜炎、脳炎、顔面神経麻痺などの神経麻痺、結膜炎・角膜炎や虹彩毛様体炎などの眼の障害などの深刻な合併症が生じるケースもあります。

小児期より帯状疱疹を発症することはありますが、発症率は50代から急増し、高齢者に多く発症します。高齢化が進む日本では、今後さらに患者数が増えることが予想されています。

そこで導入されたのが、子どもに使う水痘ワクチンで帯状疱疹を予防する方法です。2016年3月、厚生労働省は50歳以上の方に限り、帯状疱疹予防を目的とする水痘ワクチン接種を承認しました。

▼水ぼうそうが減ると帯状疱疹は増える!?

ワクチンとは、毒性を弱めたウイルスを接種することで免疫をつけ、そのウイルスが原因の病気にかからないようにするものです。

最初に述べたように、帯状疱疹は水ぼうそうと同じウイルスが原因のため、水ぼうそうを防ぐ水痘ワクチンを接種することで帯状疱疹も防げるわけです。

水ぼうそうの予防接種の場合、日本では2014年10月から定期接種（法律に基づき市区町村が主体となって実施する予防接種）となったため、水ぼうそうの発症者数はこの2年間で4分の1まで減少しました。今後さらに大きく減少することが予想されます。

ところが今、水ぼうそうの減少により、帯状疱疹が増えることが危惧されているのです。

というのは、これまでは水ぼうそうに感染した子どもたちが周囲にいることで水痘ウイルスを浴び、自然と免疫が強化されていました。しかし社会から水ぼうそうが減少すると、水痘ウイルスに対する免疫強化の機会も減少します。

実際、1995年から小児の水痘ワクチンの義務接種が行われているアメリカでは、水ぼうそうが79％減少した後、帯状疱疹は90％も増加してしまいました。

水ぼうそうの定期接種が始まったばかりの日本では、今後、帯状疱疹予防の必要性が高まるものと考えられます。

▼症状軽減の効果もあるワクチン接種

ワクチンを接種すれば帯状疱疹を100％防げるというわけではありませんが、たとえ発症しても軽症で済み、帯状疱疹後神経痛に苦しむことも少なくなります。

最終的に帯状疱疹の患者数が減少すれば、医療費削減にもつながります。

ただ、実際に帯状疱疹の予防接種を始めている医療機関はまだまだ少ないのが実情です。

保険適用とはなっていないため費用は自費負担となり、料金は医療機関によって異なります。

帯状疱疹の予防ワクチンを接種したいとお考えの方は、まずはお近くの医療機関に電話等で問い合わせてから受診されることをお勧めします。

帯状疱疹の特徴

- チクチク、ピリピリ、シクシク、ズキズキといったように、痛みの表現は人それぞれ。 中には、「焼け火箸で刺されるような痛み」と表現する人もいる。
- 水ぼうそうでは全身に発疹が出るが、帯状疱疹では、顔だけ、胸部だけ、腹部だけ、といったように限局して発疹が出る。
- 発疹が、身体の片側（右半身、もしくは左半身）にだけに出現する。
- 発疹が消えても、痛みが長期間（1か月以上）残ることもある。3か月以上たっても痛みが続く場合は、後遺症である「帯状疱疹後神経痛」と定義される。
- 水ぼうそうにかかったことがない人が帯状疱疹の患者と接触すると、感染して「水ぼうそう」を発症することがあるが、帯状疱疹にかかることはない。